

翻 訳

## 米軍資料にみる 6・17鹿児島空襲

—米軍第21爆撃機集団「作戦任務報告書」(試訳)—

小栗 実 柳原 敏昭

はじめに

1945年6月17日の深夜、鹿児島市はアメリカ軍の B29爆撃隊による空襲を受け、市内の大部分を焼失し、2000名を越える死者を出した。いわゆる、6・17鹿児島空襲である。ここに我々が訳出を試みるのは、その夜の空襲実行部隊が作成した「作戦任務報告書」(Tactical Mission Report)である。以下、まず、6・17鹿児島空襲に対するアメリカ軍の作戦上の位置づけと「作戦任務報告書」の資料的性格について簡単に記し、読者の理解の一助としたい。

### 1、マリアナ基地の B29部隊とその指揮系統

【45年6月17日当時におけるマリアナ基地爆撃隊】

アメリカ陸軍第20航空軍 (在ワシントン D.C.)

|

第21爆撃機集団 (在グアム、司令官カーチス・E・ルメイ)

|

第58航空団 第73航空団 第313航空団 第314航空団 第315航空団 第509混成群団  
(テニアン西)(サイパン・イスレー)(テニアン北)(グアム北)(グアム北西)(テニアン北)

\* 訳語と原文との関係は次の通りである。航空軍 Air Force、爆撃機集団 Bomber Command、航空団 Wing、群団 Group。なお、群団の下に戦隊 Squadronがあった。

1944年(以下、44年のように表記)6月から8月にかけての戦闘でマリアナ諸島を占領したアメリカ軍は、サイパン・グアム・テニアン島に飛行場を造成

し、超大型爆撃機ボーイング B29部隊を配備した。もちろん、日本本土空襲を目的としたものである。この爆撃隊の配備・指揮系統には変遷があったが、45年6月の時点では、上図ようになっていた。このうち6・17鹿児島空襲を行ったのは、第314航空団であり、それはさらに、第19・29・39・330の四つの群団からなっていた。

## 2、マリアナ基地からの戦略爆撃の時期区分

マリアナ基地からの B29による日本空襲は、44年11月24日から45年8月15日まで続けられたが、その間をおおむね次の三つの時期に区分できる。

〔第1期〕 44年11月24日～45年3月4日

軍事工場（航空機工場を中心とする）に対する高々度精密爆撃が行われた時期。主要投下弾は500ポンド高性能爆弾で、焼夷弾の使用例は少ない。投弾は、主として目視で行われた。なお、45年1月に第21爆撃機集団の司令官がヘイウッド・S・ハンセルからカーチス・E・ルメイに替わっている。

〔第2期〕 45年3月10日～6月15日

大都市市街地への無差別焼夷弾空襲が行われた時期。東京・横浜・川崎・名古屋・大阪・尼崎・神戸が目標とされた。B29は、編隊を組まず、低空に降下し、AN-APQ-13レーダーによって投弾した。なお、4月16日から5月11日までは、沖縄戦支援のため九州の航空基地が爆撃目標となり、大都市への空襲は中断された。

〔第3期〕 45年6月17日～8月15日

中小都市空襲の時期。59都市が目標となった。第2期同様の形態での無差別焼夷弾空襲が行われた。この時期の最終局面で広島・長崎への原爆投下が行われた。

いうまでもなく、6・17鹿児島空襲は、第3期に該当するもので、しかもその最初の作戦であった。第3期においては、第58・73・313・314の四航空団にそれぞれ一都市を割り当て、一夜に四都市を同時爆撃するのが原則であった。6月17日の場合も、鹿児島とともに大牟田（第58航空団）・浜松（第73航空団）・四日市（第313航空団）が爆撃されている。

## 3、「作戦任務報告書」について

グアムの第21爆撃機集団（45年7月17日以降は第20航空軍）司令部は、空襲

を実行するごとに「作戦任務報告書」（以下、「報告書」）を作成して、直上の司令部に提出していた。6頁にあるのがその表紙である。描かれた日本列島の右下には、作戦任務番号（Mission No.）と日付、「報告書」の写の番号が記されている。このうち作戦任務番号は、標的となった都市にひとつずつ割り当てられていた。6・17鹿児島空襲作戦は206番であった。また、第3期の「報告書」は、一夜の四都市への作戦が一冊にまとめられている。6・17空襲の場合は、鹿児島とともに大牟田（作戦任務番号207）・浜松（同208）・四日市（同209）の分が一括されている。

「報告書」は、次のような共通した形式で書かれていた。

作戦の概説（本文）

付篇 A—作戦 B—天候 C—通信 D—情報 E—集約統計表  
F—野戦命令書 G—配付先一覧表

「報告書」は、作戦遂行直後に、実行者によって作られた文書であるから、上のような内容について信頼度の高い記述がなされているとみなしてよい。したがって、近年は空襲や戦災の記録を作成する場合に、「報告書」を参照することが広く行われるようになってきている。しかし、鹿児島県においては、いまだそのような作業は行われておらず、日本側資料のみに基づいて叙述が行われているのが現状である。

体験談など日本側の記録が貴重なものであることはいうまでもないが、また、限界も明らかである。たとえば、来襲機数・爆撃時間・投下弾量などの数値については、日本側資料が推測の域を出るものでないのは当然である。それらが確定できるだけでも「報告書」を利用する意義があろう（ただし、6・17鹿児島空襲に関するそれらの数値について、本試訳で初めて明らかにされるわけではない。参考文献②④参照）。

その他、「報告書」によって判明することがらは多い。詳細については、実際に訳文にあたっていただきたいが、ごく簡単に見ておけば、まず、アメリカ軍によって鹿児島市がどのように位置づけられていたかが、明瞭にわかる。すなわち、10頁の「目標の重要性」という箇所がそれである。13頁にも、「鹿児島がレーダーによってもっとも簡単に確認することのできる市の一つであろう」とある。なぜ鹿児島市が、日本空襲作戦第3期の最初の目標に選ばれたのかは必ずしも明確ではないが、このあたりにその理由の一端が示されているのではないだろうか。また、6・17空襲に限ったことではないが、「報告書」の記述は非常に詳細である。たとえば、投下爆弾量はもとより射撃の回数まで記されているのには驚かされる。天候の予測・観測に関する記述、遭難した際の救助

体制に関する記述などからは、アメリカ軍の用意周到さが如実にうかがわれる。一方、「報告書」は、日本側の防空体制の劣弱さもよく示している。当時、鹿児島県には、本土だけでも13ヶ所の航空基地があったが、迎撃した戦闘機は、ごくわずかであった（37頁）。対空砲火も不正確で貧弱だったとある（38頁）。したがって、損害を受けた B29は3機にとどまっている（原因不明で行方不明になった機が1機ある。43頁付表）。

#### 4、翻訳にあたって

「報告書」は、当初、機密文書であったが、アメリカの情報公開法に従って、ワシントンの国立公文書館におさめられ公開された。81年5月末には、日本の国立国会図書館憲政資料室にマイクロフィルムが入った。また、同年8月には、大阪平和祈念資料室もマイクロフィルムを入手し、現在では、大阪府国際平和センターが引き継いでいる。

。95年6月に鹿児島市で開かれた「平和のための戦争展」では、実行委員会が、国立国会図書館より6・17空襲の「報告書」マイクロフィルムのコピーを取り寄せ、展示に利用した。小栗と柳原は、その際に依頼されて翻訳を担当した。今回は、それに手を加え公表するものである。

近現代史や軍事技術の知識に乏しい我々にとって、軍事専門用語を多数含む「報告書」は、かなり難解であった。そのような中で、後掲のリストに掲げた参考文献は、よき導き手となってくれた。ことに参考文献②③、および高松空襲の「報告書」の翻訳（木村恵美子氏・横井義則氏訳）は、常に座右におきながら作業にあたった。定型化した部分については、そのまま訳文を利用したところもある。この「はじめに」も参考文献に全面的に依拠している。より深い理解をえたい方は、ぜひ参照していただきたい。

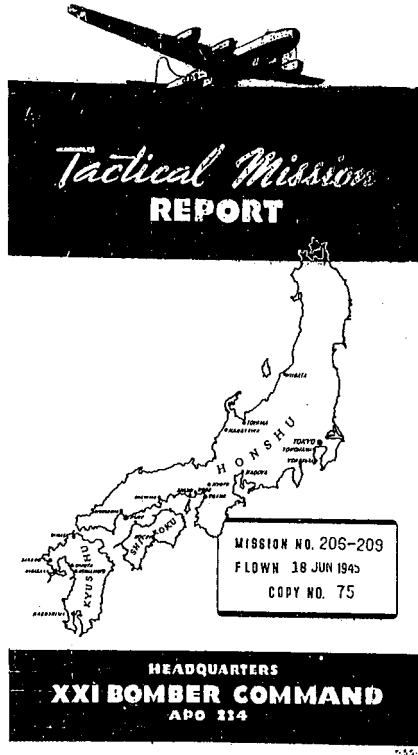
最後に、「報告書」は、あくまでも攻撃実行側の記録であることを強調しておかなければならない。地上の惨状は完全に視野の外におかれているのである。これが、空襲の一面しか示していないことは論をまたないであろう。地上における体験、空襲を受けた側の記録をあわせ読むことが必要である（参考文献①など）。そして、我々は、世界に先駆けて戦略爆撃＝都市そのものに対する無差別爆撃を行ったのが、ほかならぬ日本の軍隊であったことも忘れてはならない（参考文献⑤）。

〔主要参考文献〕

- ①鹿児島県の空襲を記録する会『鹿児島県の空襲戦災の記録』第一集（1985年）  
生活協同組合コープかごしま『戦争体験文集 忘れまい、あれから50年』（1996年）
- ②奥住喜重『中小都市空襲』（三省堂、1988年）
- ③奥住喜重・早乙女勝元『東京を爆撃せよ—作戦任務報告書は語る』（三省堂、1990年）
- ④小山仁志『米軍資料 日本空襲の全容』（東方出版、1995年）
- ⑤前田哲男「戦略爆撃の思想」（歴史学研究会編 講座世界史8『戦争と民衆』東大出版会、1996年）

\* 国立国会図書館所蔵の「米軍第21爆撃機集団作戦任務報告書」（任務番号206-209）  
マイクロフィルムの架蔵番号は、USB-5 第5リール第60コマ～第143コマである。

SECRET



SECRET

【訳文について】

- 鹿児島市に関する部分の抄訳である。したがって、大牟田市・浜松市・四日市市に関する部分は、図表も含めて原則として省略した。
- 図表の中には、鹿児島市に関するものであっても、紙数と印刷技術の関係で割愛せざるをえなかったものがある。
- 訳者の注は、〔 〕で示した。ただし、最小限にとどめた。詳しくは、参考文献②③を参照されたい。なお、( ) とあるのは、すべて原文が ( ) 付きとなっている部分である。
- 「報告書」の時刻は、グリニッジ標準時(2時刻)で表されている。たとえば、171406z(17日14時6分)のごとくである。本文中では、～日～時～分のように記すが、図表中では、原文どおり記す。なお、グリニッジ標準時の日本時間への換算は、9時間を加え、24時間を超えた分は、1日繰り上げればよい。
- 単位の換算は次のようである。  
 1フィートは約0.3メートル。 1マイルは、約1.61キロメートル。  
 1ポンドは、約0.45キログラム。1ガロンは、約3.8リットル。

秘 密

前 文

この報告書は、日本列島の本州および九州の目標に対して、1945年6月17日～18日に遂行した第21爆撃機集団作戦任務番号206～209に関するものである。

作戦任務番号204および205は、特別の作戦であり、その報告書は特別に配付される。

第21爆撃機集団司令部  
軍事郵便局第234号

作戦任務報告書

野戦命令書第87号

作戦任務番号206～209

日本の九州および本州の島々を目標とする

1945年6月17～18日

目 次

作戦の概説	1 頁
付篇A－作戦	12 頁
第1部 航路図	13 頁
第2部 爆撃	14 頁
第3部 攻撃の中間点	15 頁
第4部 飛行技術図	16 頁
第5部 レーダー	18 頁
第6部 レーダー写真	20 頁
第7部 射撃	24 頁
第8部 空海救助	25 頁
付篇B－天候	26 頁
第1部 天候の要約	27 頁

第2部	予報天候対観測天候	29&30頁
第3部	予報天気図	31頁
第4部	飛行技術図	32頁
付篇C	通信	33頁
第1部	レーダー妨害	34頁
第2部	無線通信	35頁
付篇D	情報	38頁
第1部	敵空軍の抵抗	39頁
第2部	敵の対空砲火	39頁
第3部	損害の査定	44頁
付篇E	集約統計表	58頁
付篇F	第21爆撃機集団野戦命令書	67頁
付篇G	配付先一覧表	72頁

[目次の頁数は、原文の頁数である。]

作製 第21爆撃機集団A-2部

[以下、見出しは、上位から下位に向けて、順次、1. a.

(1) (a) 1. a. のようになっている。]



第21爆撃機集団  
司令官の職権により  
機密

日付 45年6月18日  
イニシャル JDG

第21爆撃機集団司令部  
軍事郵便局第234号

件名：1945年6月17日～18日の鹿児島市街地、大牟田市街地、浜松市街地、四日市市街地に対する攻撃に関する報告  
宛先：第20航空軍司令官殿                      ワシントン D.C. 25.

1. 作戦任務の確認

a. 1945年6月17日付の第21爆撃機集団司令部野戦命令書第87号は、本州および九州の目標に対する共同攻撃（第21爆撃機集団作戦任務番号206～209）に参加するよう、第58・第73・第313・第314航空団に命令する。

b. 指定された目標

- (1) 作戦任務番号206の第1目標（有視界攻撃およびレーダー攻撃）
  - (a) 鹿児島市街地
- (2) 作戦任務番号207の第1目標（有視界攻撃およびレーダー攻撃）
  - (a) 大牟田市街地
- (3) 作戦任務番号208の第1目標（有視界攻撃およびレーダー攻撃）
  - (a) 浜松市街地
- (4) 作戦任務番号209の第1目標（有視界攻撃およびレーダー攻撃）
  - (a) 四日市市街地

2. 作戦の戦略および計画

a. 戦略：6月半ばから数週間にわたって、日本をおおうと予想される雨期が正確な爆撃を不可能にする。日本の軍事経済に対して、絶え間なく圧力をかけつつける必要性が、本司令部をして、都市の工場地帯に対する焼夷弾による

夜間攻撃計画を決定させた。その際、存在する工場施設に対して、部隊は、しばしの間、レーダーによって完全な爆撃を加えなくてはならないことが予想される。

b. 目標の重要性

(1) 鹿児島市街地：鹿児島は海運の中心として重要であり、南九州における大きな港を有する都市である。人材と同様に農業生産物が、帝国の他の地方に送りだされている。重要な鉄道の終着駅である鹿児島は、大きな貨物基地、倉庫、工場、石油タンクをもっている。市街地には、ガス工場と絹織物工場の一画があり、さらに、九州の送電網とむすびついた4箇所の発電所がある。

(2) 略

(3) 略

(4) 略

c. 計画の詳細－作戦関係

(1) 爆撃計画

(a) 搭載する爆弾の決定

1. 鹿児島市街地－作戦任務番号206

a. 第314航空団は、M47 焼夷弾および M69の集束弾をそれぞれ半分ずつ搭載し、最大努力をもってこの目標を攻撃する。

b. 検討事項および理由は、浜松市街地に対する攻撃計画と同様である。

2. 略

3. 浜松市街地－作戦任務番号208

a. 必要とされた爆弾と戦力

1. 第73航空団は、AN-M47A2 焼夷弾を搭載した2群団、および M69 焼夷弾を束ねた500ポンド集束弾を搭載した2群団によって、この目標を攻撃することとされた。主要編隊にさきがけて、目標地域に目印をつけるための照明弾を投下する飛行機もまた M47 焼夷弾を搭載しなければならなかった。中小都市に対する攻撃はこれまで行われてはこなかったし、無編隊による夜間におけるレーダー爆撃、目標に対する正確な爆撃は失敗に終わってきたの

で、最大努力をもって攻撃することが計画された。防衛施設を不能にし、破壊を実効あるものにするために、目標地域に対して、1平方マイル当たりおよそ200トンの密度で爆撃を行うことが計画された。

2. 目標には、工場タイプおよび住居タイプの主として木でつくられた一階建ておよび多層階建ての建物が入り混じっていた。M47A2焼夷弾とM69の集束弾との組み合わせは、目標地域の破壊にとって、最も効果的な兵器として選ばれた。大規模な家屋火災をおこすことによって、組織された防火体制を麻痺させるために、M47A2焼夷弾を搭載した群団が、まず最初に目標を攻撃するように計画された。M69焼夷弾によって最大級の家屋火災が起きるのであろうことが予測された。

#### b. 起爆装置

AN-M47A2焼夷弾には、即発突起の起爆装置が取り付けられ、集束弾には目標の2500フィート上空で起動するように起爆装置が取り付けられた。その高度は、10000フィート以下の場合、集束弾および個別爆弾が最も効果を発揮するよう考えられたものである。

#### c. 投下間隔調整装置の設定

M47A2焼夷弾は6個の集束ごとに75フィート間隔で、M69の集束弾については50フィート間隔で投下された。過去の作戦で、この間隔が効果的であることが判明していた。

### 4. 略

#### (b) 爆撃

1. 浜松、大牟田、四日市、鹿児島はさほど強固ではないが敵機により防衛されていることがわかっているため、爆撃高度は7000フィートから8800フィートにとることにした。この高度にあっては、風の流れはなんらの影響も及ぼさないだろう。攻撃軸は、レーダーによる接近方法にとって最適なものが選ばれた。すべての群団は、目標上空で70分間以内に戦力〔爆撃時間〕を圧縮することを指示された。このことによって、防火体制が麻痺し、敵機による防衛もまた麻痺することが予想された。

2. 爆撃高度、攻撃軸、他の関連データは以下のとおりである。

a. 略

b. 略

c. 略

d. 第314航空団 (第21爆撃集団 BC モザイク図 鹿児島地域 NO.

90. 38参照)

高度	7000~7800フィート
攻撃軸	329度〔北にむかって〕
攻撃始点	北緯 31° 14′ 東経130° 47′
爆撃中心点	064083
爆撃航程	37マイル
同 飛行時間	8.5分
戦力	4 群団-最大努力

(2) 飛行

(a) 鹿児島市街地-作戦任務番号206

基地から硫黄島へ	作戦原則どおり
↓	
北緯 30° 50′ 東経131° 04′	種子島の先端、容易に確認可能な航 路変更点
↓	
北緯 31° 14′ 東経130° 47′ (攻撃始点)	航路変更点から直線上にある海岸上 の地点で、航路変更点から直線の爆 撃航程をなす
↓	
目標	鹿児島
↓	
北緯 31° 40′ 東経130° 40′	対空砲火を避けるために右旋回
↓	
北緯 31° 30′ 東経131° 25′	離岸地点に到達
↓	
硫黄島から基地へ	作戦原則どおり

(b) 略

(c) 略

(d) 略

(3) 飛行技術

(a) 飛行計画 爆撃航程および攻撃戦力の圧縮時をのぞいて、飛行高度、速度は第21爆撃機集団の作戦原則にしたがって指定される。爆撃機の空中集結は、攻撃戦力の圧縮時にのみ行われる。

(b) 搭載

1. 第58、第73、第313、第314航空団は燃料補助タンクを必要としなかった。給油量は、燃料残料データによれば、全体でおよそ6700ガロンだった。

2. 爆撃最大搭載量も最小搭載量も指定されなかった。

3. 最大爆撃能力は次のように予想された。

a. 略

b. 略

c. 略

d. 第314航空団	最大能力	15000ポンド
	予想される平均	14000ポンド

4. 弾薬搭載量は300ポンドに見積もられた。

(4) レーダー

(a) 鹿児島湾の東側にある鹿児島市は、レーダーによる<sup>〔ママ〕</sup>恰好の目標である。おそらく鹿児島市は、レーダーによってもっとも簡単に確認することのできる市の一つであろう。攻撃始点もまた良好で、適切な標識点を伴った長い爆撃航程が得られるだろう。鹿児島市の映像は、レーダースコープによくとらえることができ、間接的方法か直接的方法によって爆撃することができる。

(b) 略

(c) 略

(d) 略

(5) レーダー妨害 [RCM: Radar Counter Measure]

(a) 敵の早期警戒レーダー、火砲照準用レーダーを方向探知し、38～3000メガサイクル〔以下、mc〕域で広く探索することが計画された。190～210mc、78mc 域での電波を一斉妨害するために、すべての爆撃機に電波妨害送信機をすえつけることになっていた。スポット電波妨害機は、上記の周波数帯域外であられるすべての火砲照準用レーダーに対して用いられる予定であった。14人の RCM 監視員が探索と電波妨害のために配置される計画であった。

(b) 同様に第20航空軍副司令官の要請により、横須賀付近の189キロサイクル〔以下、kc〕の通信基地を方向探知することが計画された。

(6) 空海救助

(a) 海軍：

海軍には作戦の詳細が伝えられた。そして以下の空海救助の体制がとられた。

1. 9隻の潜水艦が作戦の間中、配置された。

北緯34° 20′	東経138° 00′
北緯33° 30′	東経136° 30′
北緯32° 00′	東経138° 50′
北緯32° 00′	東経137° 20′
北緯32° 30′	東経132° 00′
北緯31° 00′	東経133° 50′
北緯31° 20′	東経131° 45′
北緯30° 00′	東経139° 00′
北緯29° 50′	東経134° 00′

2. 4隻の水上艇が作戦の間中、以下の諸地点に配置された。

北緯28° 00′	東経137° 05′
北緯28° 00′	東経139° 55′
北緯26° 10′	東経140° 15′
北緯18° 00′	東経144° 30′

3. 6機の飛行艇が以下の諸地点に配置された。

17日16時25分～すべての爆撃機の帰還まで	北緯 30° 00′ 東経139° 00′
17日17時10分～すべての爆撃機の帰還まで	北緯 28° 00′ 東経137° 05′
17日16時55分～すべての爆撃機の帰還まで	北緯 28° 00′ 東経139° 55′
17日17時20分～すべての爆撃機の帰還まで	北緯 26° 10′ 東経140° 15′
17日20時25分～17日22時25分	北緯 20° 00′ 東経143° 00′
17日20時25分～17日22時25分	北緯 18° 00′ 東経144° 30′

4. 離陸、着陸が集中する時間帯には、サイパン、テナン、グアムのごく近海に、遭難救助船が配置された。

(b) 陸軍：

すべての爆撃機が通過するまで、8機のスーパーダンボ〔救助用B-29〕がこの作戦のために配置された。

17日15時00分～	北緯34° 20′	東経138° 00′
17日15時40分～	北緯32° 00′	東経138° 50′
17日16時15分～	北緯33° 30′	東経136° 30′
17日16時45分～	北緯32° 00′	東経137° 20′
17日16時15分～	北緯32° 30′	東経132° 00′
17日17時05分～	北緯31° 00′	東経133° 50′
17日15時50分～	北緯31° 20′	東経131° 45′
17日16時40分～	北緯29° 50′	東経134° 00′

d. 計画の詳細—情報

(1) 敵空軍の抵抗

(a) 40～60機の日本の戦闘機が大牟田と鹿兒島にたいする爆撃を妨害すると予想された。この妨害は弱いものであろうと予想された。

(b) 略

(2) 敵の対空砲火

(a) 作戦任務番号206 鹿兒島

1. 対空防衛—写真の解析から得られた鹿兒島の防衛体制の全体的な戦力は以下のとおりである。

重対空砲 32基 中対空砲 59基 サーチライト 2基

2. 攻撃軸と高度

鹿兒島では夜間攻撃に対する防衛力が比較的貧弱であるため、まずレーダーによるもっとも適切な接近方法が可能なルートによって、攻撃軸が決定された。目標市街地への進入路は、存在が確認されていたすべての高射砲を避けるように計画された。また、7000フィートの最低高度が計画された。

(b) 略

(c) 略

(d) 略

### 3. 作戦任務の実行

#### a. 離陸

(1) 離陸は以下のように行われた。

作戦任務番号	航空団	出撃案内機	機数	一番機の離陸	最終機の離陸
206	314	-	120	17日 7時00分	17日 8時26分
207	58	-	126	17日 8時00分	17日 9時22分
208	73	12	125	17日 9時02分	17日10時11分
209	313	6	88	17日 9時56分	17日11時07分
計		18	459	17日 7時00分	17日11時07分

この全機数には、空海救助の任務に配置された8機のスーパーダンボは含まれていない。

#### b. 往路

この任務には、なんら航行上困難な点はなかった。

#### c. 目標上空

(1) 作戦任務番号206

(a) 第1目標：117機の爆撃機が17日14時06分から17日15時49分まで、高度7000フィートから9200フィートで、809.6トンの爆弾を鹿児島市街地に対して投下した。

(b) 臨機の目標：

1. 1機の爆撃機が山川に6.3トンの爆弾を投下した。

2. 1機の爆撃機が岩川飛行場に0.7トンの爆弾を投下した。この爆撃機は第1目標に対しても爆弾を投下した。

(2) 略

(3) 略

(4) 略

(5) 21機が、この四つの作戦において、成果をあげることができなかった。

#### d. 帰投路

帰投路になんらの困難な点はなかった。

#### e. 着陸

爆撃機は、以下のように基地に着陸した。



作戦任務番号	航空団	一番機の着陸	最終機の離陸
206	314	17日21時10分	17日23時28分

〔 原版の汚れにより判読不能 〕

207～209 略

この4つの作戦任務で13機は硫黄島に着陸した。

f. 損失

1機のB29が理由不明により損失。

g. 作戦概要

(1) 航路図（詳しくは付篇 A 第1部を参照）

(a) 無線誘導機は効果的な補助であった。天文航法とおなじく約6回にわたって、位置の確認に用いられた。

(b) 故障対策装備は正常だった。

(c) 目標上空での戦力の圧縮は、第73航空団はもっともよい結果を達成したことからわかるように、すべて満足すべきものであった。目標の高度7800フィートにおける風は華氏280度、24ノットだった。

(2) 爆撃（詳細および目標地点については付篇 A 第2部および第3部を参照）

すべての航空団について、あらかじめ指定されていた爆撃高度は7000フィートから7800フィートだった。しかし、目標に接近する途上において、雲量が10分の1から10分の8へと変化した。その結果、飛行高度が7000フィートから9200フィートに変えられた。爆撃は、目視による作業を平行しながら、レーダーにより行われた。

(3) 飛行技術（図については付篇 A 第4部を参照）

(a) 飛行としての作戦任務の解説

1. 本土への航行と結集

高度4000フィートから10000フィートまでの爆撃機の個々の上昇は、離陸後ただちに行われた。その高度で初期の飛行が行われた。結集は行われなかった。

2. 爆撃航程

爆撃は7000～9200フィートの高度で、個々の爆撃機によって行われた。

3. 基地への帰還

もっとも適切な帰還は、高度10000フィートから徐々に降下し、1662ガロンの燃料を使用して、180目盛航空速度で行われた。

(b) コメント

2～3の例外をのぞいて、すべての爆撃機は搭載量いっぱいの爆弾を積み、翼、中央の油槽を満タンにした。

(4) レーダー（詳細とスコープ写真については付篇 A 第5部および第6部を参照）

- (a) 370機の爆撃機がレーダー飛行を行った。
- (b) 340機が有視界飛行による補正をともなったレーダー飛行を行った。
- (c) 21機が攻撃軸をはずれた目標地点では有視界飛行を行った。
- (d) 27機は有視界飛行のみをおこなった。

(5) 砲術（詳細については付篇 A 第7部を参照）

この作戦任務を通じてなんらの特記すべき問題はなかった。

(6) 空海救助（図については付篇 A 第8部を参照）

この作戦任務にかんして、不時着はなかった。

h. 天候（詳細については付篇 B 第1部を参照）

天候はおおむね予報されたとおりだった。

i. 通信

(1) レーダー妨害（詳細については付篇 C 第1部を参照）

電波の攪乱、妨害は十分な結果をもたらして実行された。

(2) 無線通信（詳細については付篇 C 第2部を参照）

情報についてなんらの異常な問題は生じなかった。ネット規律、情報保全是すぐれたものだった。

j. 情報についての概況

(1) 敵の防空体制（詳細については付篇 D 第1部を参照）

たった4機の敵機が見られたにとどまる。そして16回の攻撃が加えられた。B29にはなんの損害もなく、B29の砲術手からも損害報告はあがっていない。

(2) 敵の対空体制（詳細については付篇 D 第2部を参照）

4つの夜間攻撃に関して、たった4機の爆撃機が高射砲によって損害をこうむったにすぎない。

(3) 損害の査定（詳細については付篇 D 第3部を参照）

(a) 作戦任務番号206によって、鹿児島市2.11平方マイル（市街地の44.1%）が破壊された。

(b) 略

(c) 略

(d) 略

署名

カーチス・E・ルメイ

合衆国少将

司令官

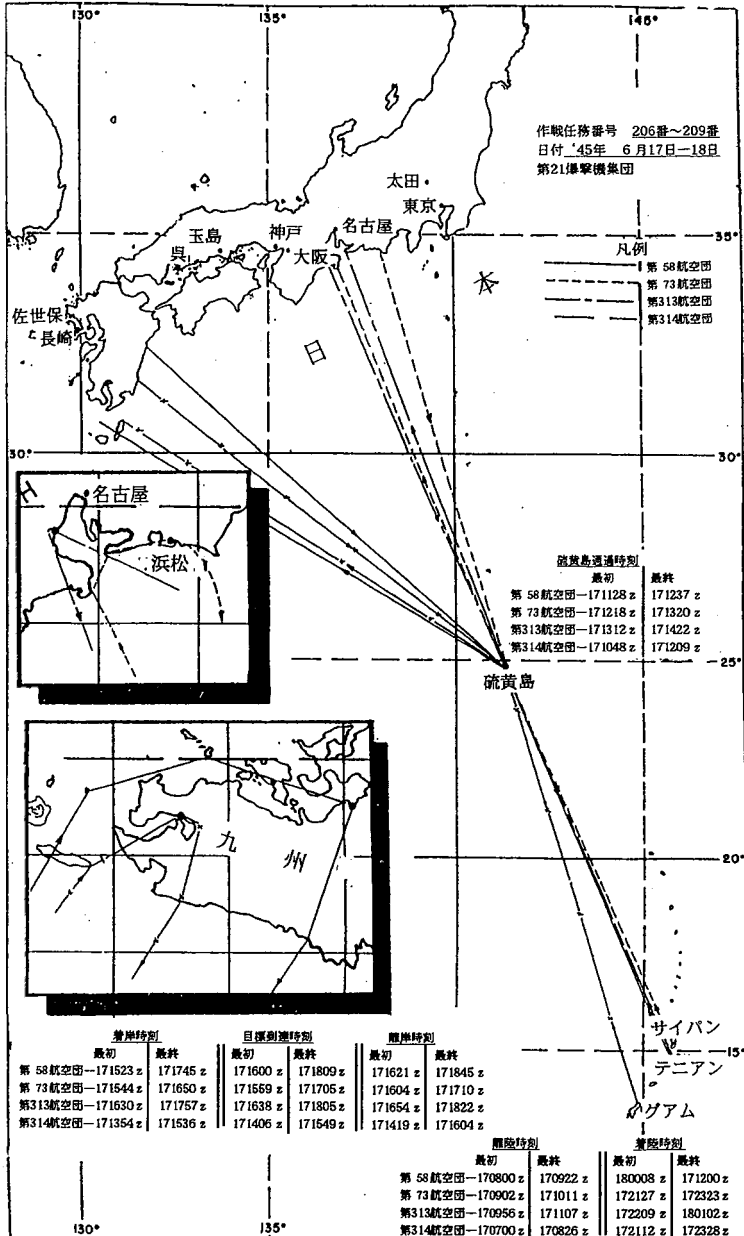
付篇 A 作戦

- 第 1 部 航跡図
- 第 2 部 爆撃
- 第 3 部 攻撃の中間地点
- 第 4 部 飛行技術図
- 第 5 部 レーダー
- 第 6 部 レーダー・スコープ面図
- 第 7 部 砲術
- 第 8 部 空海救助図

1945年4月

第1部 航路図

秘密



## 第2部 爆撃

1. 攻撃始点・攻撃軸は、きわめて満足すべきものだったと報告された。第73航空団からは、指定された攻撃軸が変更されたのは、攻撃始点で適切な時刻に転回することを失敗したことによると報告があった。

2. 直面した唯一の困難は、目標への接近の際の天候であった。第73航空団は帰還の際、窓がひどく凍りついたことを報告した。これにより、爆撃手の位置からの視界が低下した。

### 3. 作戦任務番号第206 鹿兒島

a. 第314航空団の2つの群団は M47焼夷弾を搭載した。また、2つの群団は M69爆弾を束ねた E46集束爆弾を搭載した。爆撃機ごとに搭載された平均爆弾量は14508ポンドだった。全部で826.0トンの爆弾はその98%が第1目標に投下された。

b. 8機は爆弾搭載棚が機能不全だったと報告した。そして5機は B-10懸架装置が機能不全だったと報告した。棚の機能不全は、電気的な接続不良があり電気リード線が燃えたのが原因だった。

c. すべての爆撃機は99分間、目標に爆撃を加えた。報告された平均的な偏流は右5度だった。

4. 略

5. 略

6. 略

第3部 攻撃の中間地点図 [略]

第4部 飛行技術図 [略]

第5部 レーダー

### 1. レーダーによる爆撃 AN/APQ-13

- a. 離陸の際、使用された器数： 463
- b. 爆撃に使用した爆撃機数－目標上空で使用された器数： 439
- c. 目標上空で爆撃機で使用された器数の割合： 95%

- d. 基地への帰還の際、使用された器数： 436
- e. 方位角安定装置を使用した爆撃機の数： 304
- f. APQ-13の目標の平均的な最大有効視野
- |               |      |
|---------------|------|
| 11000フィートで    | 75海里 |
| 10300フィートで    | 66海里 |
| 7000フィートで     | 66海里 |
| 10-20000フィートで | 80海里 |
- g. 電波探知装置の平均的受信距離
- |               |       |
|---------------|-------|
| 11000フィートで    | 135海里 |
| 13400フィートで    | 135海里 |
| 10-20000フィートで | 160海里 |
- h. 日本の海岸の平均最大範囲 54.5海里
- i. 先導爆撃機積載レーダーの不首尾の数 1器
- j. 障害：近くの爆撃機からのわずかな電波障害がみられた。
2. レーダー航行 AN/AP N-4: APN-9
- a. 報告された計器目盛りの固定数値 3136
- b. 使用アンテナおよび利用可能最大範囲
- |         |        |       |
|---------|--------|-------|
|         | ひきずり   | 固定数値  |
| (1) 地表波 | 675海里  | 475海里 |
| (2) 空中波 | 1200海里 | 755海里 |
- c. 妨害はなんら報告されなかった。
- d. 24機の爆撃機の機能不全が報告された。
3. 敵味方判別装置—IFF-SCR-695
- a. 作戦規則にしたがって、装置の作動・休止をくりかえした。
- b. チェック回数
- |             |      |
|-------------|------|
| (1) 略       |      |
| (2) 略       |      |
| (3) 略       |      |
| (4) 第314航空団 | 20分毎 |
- c. 機能不全は報告されなかった。
4. 絶対高度測定器—SCR-718

翻 訳

- a. 194器が作戦に使用された。
- b. 3器が作動しなかった。

5.

a. コメント 大牟田の例をのぞいて、事前にもたらされた情報はすべての目標に対して有効であった。大牟田から帰還した乗組員は、大牟田の街が帰還の際の恰好の目印になる目標であると報告した。

b. 攻撃軸からの平均的偏流は2.1度であった。

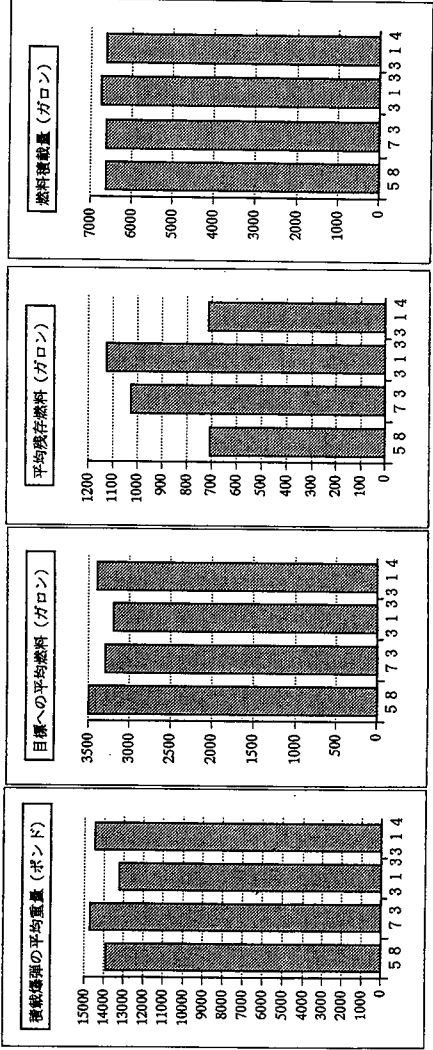
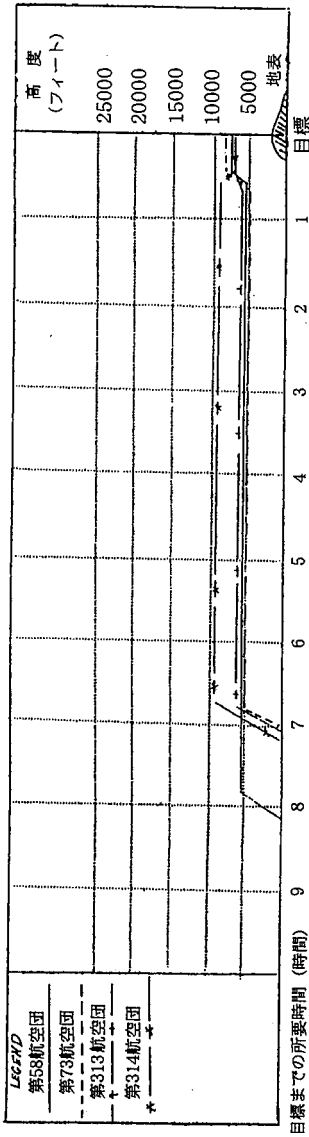
c. 爆弾投下の方法は

- (1) 固定された直接角度で
- (2) 固定されたオフセット角度で
- (3) 爆撃照準により固定されたオフセット角度で

図B 飛行技術図 [略]



図 B  
作戦任務番号 206-209



第6部 レーダー・スコープ面図 [略]

第7部 砲術

1. 砲撃を行った機数 94機
2. 回転銃座平均装填数  

UF〔上面前方〕	UA〔上面後方〕	T〔機尾〕	LA〔下面後方〕	LF〔下面前方〕
350	315	400	300	300
3. 戦闘中の1銃座当たりの平均一斉射撃回数  

UF	UA	T	LA	LF
2.66	0.5	2.5	3.5	1.43
4. 戦闘中の一斉射撃回数 335回
5. 試行のための一斉射撃回数 2213回  
 銃1基あたり平均 0.05回
6. 装填済み銃  

第58航空団	第73航空団	第313航空団	第314航空団
ホット	コールド	ホット	ホット
7. 機能不全  

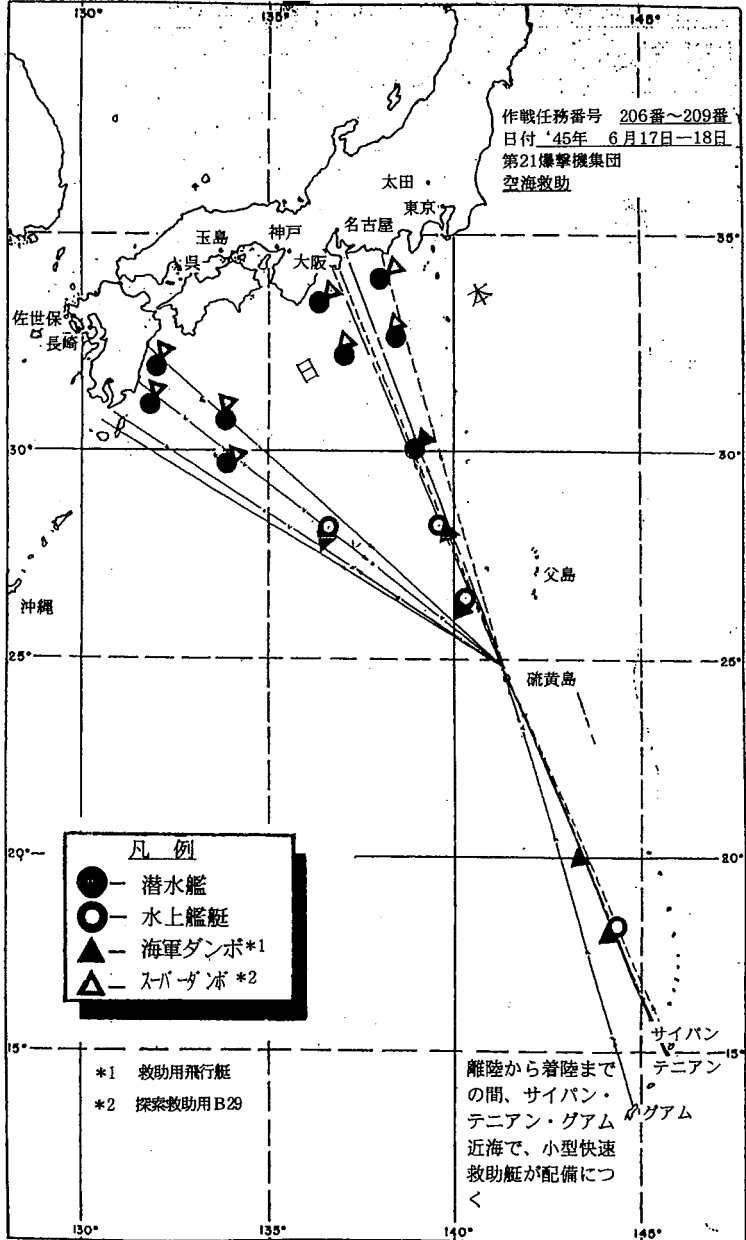
<u>CFC 銃座</u> エアーコンプレッサーの故障 スイッチ1基	<u>CAL50MG 銃座</u> ベント・リンク スプリット・バレル 弾薬つめ装置の回転 ボルトのすりきれ 撃鉄レバーのすりきれ
--	--
8. 作動した装置比率  

CFC 銃座 99.9%	CAL50MG 銃座 98.9%
-----------------	---------------------

1945年 4月

第4部 空海救助図

秘密



航路図 第21爆撃機集団 秘密

7-66-51 第35写真技術隊 複製

付篇 B 天候

第 1 部—天候の要約

第 2 部—予報天候と観測天候

第 3 部—予報天気図

第 4 部—総観天気図

第 1 部—天候の要約

日付：1945年6月17～18日

作戦計画期間中の予報—作戦任務番号206～209

基地：雲量4-6/10の低雲。雲底1800フィート、雲頂4-6000フィート。雲頂は、6-12000フィートに上昇。午後遅くなって、低から中程度のにわか雨。

航路：北緯20° まで：雲量5/10の低雲。雲底1800フィート、雲頂6000フィート。14-15000フィートに雲量2/10の中雲。3000フィートに雲量2/10の高雲。

北緯32° まで：雲量2-3/10の低雲、雲底は2000フィート、雲頂は4000フィート。そして、15000フィートに薄い中雲が散在。

海岸まで：雲量10/10の低雲・中雲そして高雲。雲底は、1200フィート、雲頂は30000フィートで降雨を伴う。

目標：すべて：境界がはっきりして来た層および北部海岸に沿うわずかな途切れを除いて、雲量10/10の低雲・中雲そして高雲が、境界の明確でない層を形成。

軍事行動中の予報—作戦任務番号206と207

基地：離陸時には、にわか雨を伴う途切れ途切れの低雲・中雲および高雲が散在。

航路：北緯27° まで、低雲・中雲および高雲が散在。北緯29° までも低雲・途切れのある中雲および高雲が散在。この地点から鹿児島までは、寒冷前線による中程度の雨を伴った一面の低雲・中雲・高雲が存在。大牟田

に向かって北緯29° から33° までは、途切れ途切れの低雲・中雲および高雲が存在。帰投路は往路と同様。

目標：鹿兒島：雲量10/10の低雲、雲底が800フィート、雲頂が8~14000フィート。10/10の雲量の中雲、雲底が1000フィートで雲頂が20000フィート。23000フィートに10/10の雲量の高雲。高度8000フィートの風は、方位240° で20ノットの予想。

観測された天候—作戦任務番号206と207

基地：途切れ途切れの低雲が散在し、中雲と高雲が広がる。

航路：北緯27° までは低雲が散在し、そして途切れ途切れの中雲が散在。27° から29° までは、このゾーンの終わりで広がっていく中雲を伴う途切れ途切れの低雲。29° にある寒冷前線によって目標までは、低雲・中雲・高雲がひろがり、軽い氷着がある。帰路も往路と同様の状態であった。

目標：鹿兒島：雲量6-8/10の低雲。雲頂は5000フィート。雲量10/10の中雲、雲底は15000フィート。高度7000フィートにおける風は、方位250° で風速22ノットであった。

大牟田：略

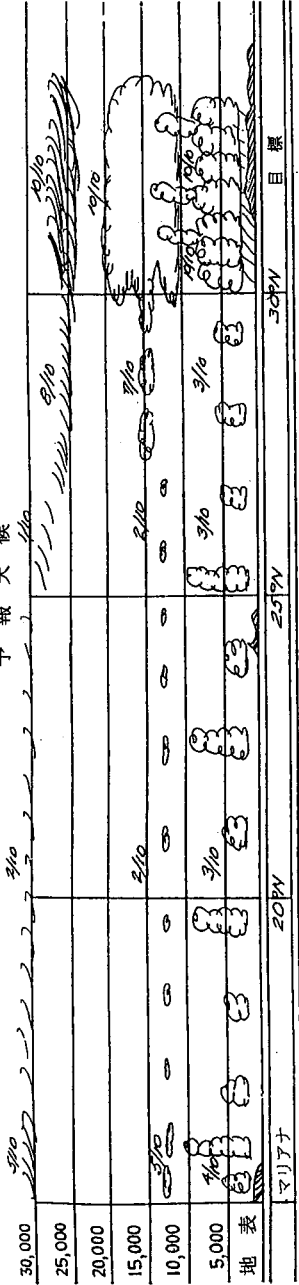
軍事行動中の予報—作戦任務番号208と209 [略]

観測された天候—作戦任務番号208と209 [略]

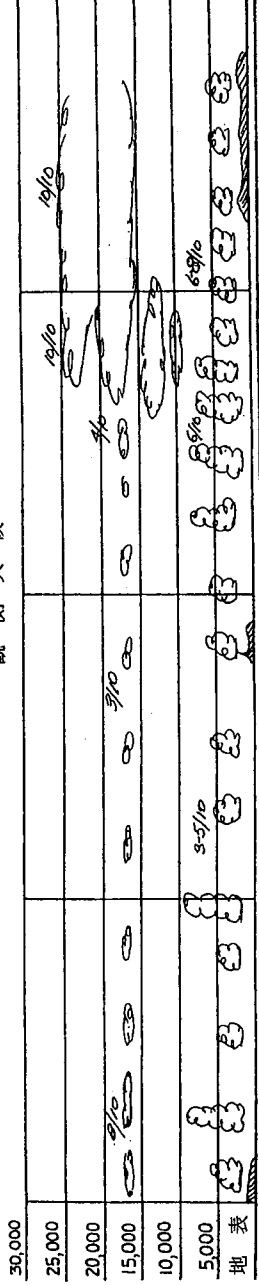
1945年6月17-18日

作戦任務番号 206 207

予報天候

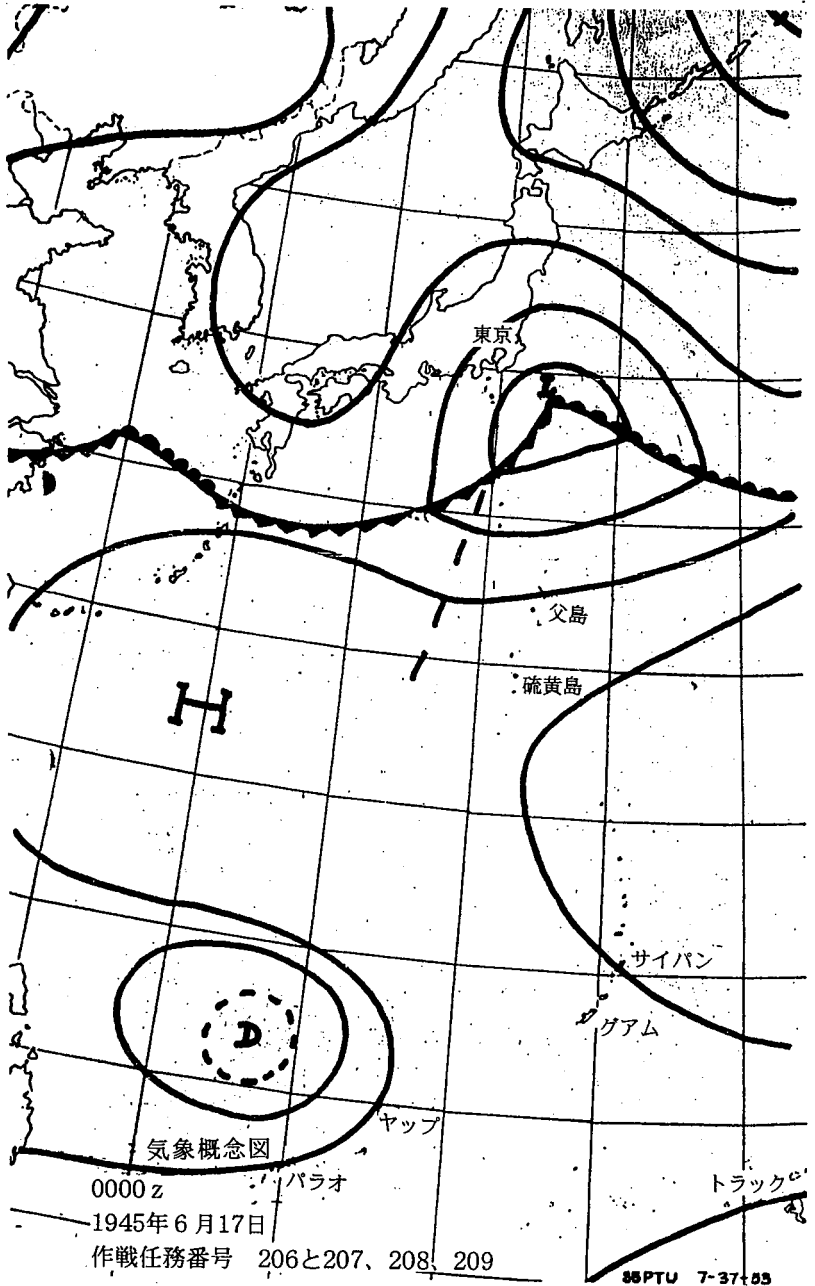


観測天候



[作戦任務番号208・209の雲量図、予報天気図は省略した。]

35PTU 7-37-53



付篇 C 通信

第 1 部—レーダー妨害

第 2 部—無線通信

第 1 部—レーダー妨害

1. 目的

- a. 早期警戒と火砲の照準レーダーを方向探知する。
- b. 38~3000mc 周波数帯での探索活動の継続。
- c. 敵のレーダー防御を無効にするために、190~210mc と 78mc 周波数帯における火砲照準レーダーを一斉妨害し、その外側の周波数帯に現れるいかなる火砲照準信号も妨害する。
- d. ロープ〔アルミ箔細帯〕の使用により、敵の探照灯と火砲照準レーダーを混乱させる。
- e. 第20航空軍副司令官の要求により、ラジオコンパスの使用によって横須賀周辺の189kc の通信基地を方向探知する。

2. 方法

- a. 14人の RCM 監視員が参加し、探索と電波妨害を実施するために次の装置を使った。516-APT-1、APQ-2、12-APT-3 (改良型)、10-APQ-8、12-APA-11、14-APR-4、4-APA-24、2-APR-5、2-APA-6、3-ARN-7。
- b. ほとんどすべての爆撃機は電氣的妨害装置を装着した。いくつかの機は2台の妨害装置を搭載した。
- c. 敵探照灯に対して付加的な防御が必要な場合には、10秒ごとに3束の割合でロープが投下された。

3. 結果

- a. 爆撃機は単独で目標を通過したので、レーダーの一斉照射は完全ではなかったが、適切であったと報告された。
- b. 妨害電波発見監視員は、敵のレーダーが妨害電波発射中には機能していなかったと報告した。
- c. 189kcの信号が1人の監視員によって聴取された。しかし、空電〔空中電気現象によって発生する不整電波〕と信号の低出力のため正確な位置を把握



することができなかった。

d. 32回の傍受がなされた。それは次の頁〔下表〕に示されている。

#### 4. 摘要

a. いくつかの異常な信号が傍受された。それは次に含まれている。

78/475/3	160/1100/18
74/495/2	94/2000/40
98/495/2	478/500/40
103/740/2	292/?/15
102/793/4	73/3000/20

傍受波の特性			傍受時の傍		日付	マリアナ時*1 *2 *3 *4 タイプ					
*5	*6	*7	受機の位置								
00069	1000	25	3430N	13710E	061845	0300	21	121	S	EW	CHI
00073	3000	20	3445N	13700E	061845	0305	21	121	S	00	000
00073	0800	00	3410N	13625E	061845	0344	21	121	S	00	000
00073	0500	46	3120N	13325E	061845	0405	21	121	S	EW	CHI
00074	0495	02	3035N	13120E	061745	1150	21	121	S	00	000
00075	0502	30	3145N	13145E	061845	0212	21	122	P	EW	CHI
00075	0800	00	3450N	13645E	061845	0312	21	121	S	00	000
00078	2000	06	3215N	13000E	061845	0245	21	121	S	GL	OTA03
00078	0475	03	3030N	13130E	061745	1145	21	121	S	00	00000
00079	0475	32	3015N	13145E	061845	0150	21	121	S	EW	CHI
00079	3500	07	3450N	13645E	061845	0310	21	121	S	GL	OTA03
00084	1500	00	3410N	13625E	061545	0350	21	121	S	00	00000
00091	0000	04	3130N	13200E	061845	0405	21	121	S	00	00000
00095	0450	18	3128N	13135E	061745	1240	21	121	S	EW	001010202
00097	2000	40	3137N	13059E	061745	1239	21	121	S	EW	001010002
00097	0370	40	3307N	13212E	061845	0310	21	122	P	EW	001010202
00098	0495	02	3040N	13110E	061745	1200	21	121	S	EW	001010202
00100	1450	20	3100N	13015E	061845	0636	21	121	S	EW	001010002
00102	0793	04	3050N	13055E	061745	1210	21	121	S	EW	001010202
00103	0740	02	3045N	13100E	061745	1206	21	121	S	EW	001010202
00104	0495	02	3300N	13215E	061745	1133	21	121	S	EW	001010202

## 翻 訳

00137	0000	20	3101N	13055E	061745	1225	21	121	S	00	000000000
00150	0300	18	3345N	13650E	061845	0334	21	121	S	EW	001030003
00156	0495	02	3300N	13215E	061745	1134	21	121	S	EW	001030003
00156	0793	02	3100N	13030E	061745	1215	21	121	S	00	000000000
00160	1100	18	3030N	13130E	061745	1200	21	121	S	00	000000000
00160	0490	03	3035N	13120E	061745	1153	21	121	S	EW	001030003
00200	0000	05	3305N	13020E	061845	0734	21	121	S	00	000000000
00202	0000	06	3305N	13020E	061045	0737	21	121	S	00	000000000
00250	0400	20	3127N	13110E	061745	1245	21	121	S	00	000000000
00292	0000	15	3152N	13405E	061845	0139	21	121	S	00	000000000
00478	0500	05	3200N	13400E	061845	0100	21	121	S	00	000000000

\*1: 情報傍受機所属機関 [21=第21爆撃機集団]

\*2: 傍受機種別情報入手法 [121=空襲に参加したB29方向を感知せず]

\*3: 信頼度 [S=疑わしい、P=確からしい]

\*4: 傍受した日本側レーダーの機能 [EW=早期警戒用、GL=火砲照準用]

\*5: 周波数 [mc]

\*6: パルス繰り返し周波数

\*7: パルスの長さ

## 第2部—無線通信

### 1. 攻撃報告

36回の攻撃報告が航空団通信局に受信された。13回分は第58航空団、9回分は第313航空団、8回分は第314航空団、そして6回分は第73航空団によってそれぞれ受信された。

### 2. フォックス送信

第73航空団が1回のフォックスメッセージを送信した。135人のオペレーターに質問したところ、128人がそのメッセージを受信していた。5人の通信オペレーターは理由なくメッセージを受信することに失敗した。一方、2人はそれぞれに食事中で監視をしていなかった。UCOPAC 天候・時間信号は規定にしたがって発信された。

### 3. 周波数

本作戦任務中において、爆撃機はサイパンの OWI 通信基地に対する敵の電波妨害を監視するのに特別な努力をした。爆撃機からは、日本本土に到着する 1 時間前、本土上空、そして本土からの帰路についてから 1 時間後と 1 時間半後に敵は非常に効果的な電波妨害を行った、という報告がはいっている。他の周波数では、二三の意図的な電波妨害の事例の受信があった。大気による電波障害は、作戦中においてすべての攻撃周波数で中程度であった。一周波数あたりの通信事故比率は次のとおりである。3 mc では 13 パーセント、7 mc では 43 パーセント、11 mc では 44 パーセント

### 4. 飛行援助

短波による方向探知のための情報要請が 6 回あり 6 回とも要請に応えられた。超短波による方向探知のための情報要請はなかった。周波数帯と地上放送局は有効に利用された。

### 5. 通信網規則と機密保持

通信網規則と機密保持については完全であったと報告された。違反はまったく報告されなかった。

### 6. 敵の送信

本作戦任務中において、次のような敵の妨害と送信が記録された。

a. 3020kc : 電波妨害用連続波と電気カミソリタイプは、12時00分と18時00分に部分的に有効であった。

b. 6615kc : 呼び出し信号 9DT および YAJ を伴った 21 時 00 分の連続波は部分的に有効であった。

c. 10305kc : 無視してよいほど微弱。

d. 3145kc :

(1) 17日14時11分の判読できない連続波は、部分的に有効であった。

(2) 17日10時00分～17日20時00分間の音声と連続波は有効ではなかった。

e. 6055kc : 無視してよいほど微弱。

f. 10880kc :

(1) 17日15時30分の判読できない連続波は、有効ではなかった。

(2) 15時15分に始まり3時間にわたったテープによる安定した送信 “QRA DE KZG” は効果がなかった。

(3) 21時00分～21時30分の間のテープからの連続波は、部分的に有効であった。

(4) 20時の10分間の安定した可聴音と連続波は部分的に有効であった。

g. 3990kc : 無視してよいほど微弱。

h. 7415kc :

(1) 17時08分の可聴音とうなりは部分的に有効。

(2) 17時07分と21時00分の連続波は部分的に有効。

i. 10820kc :

(1) 9時30分のキー発信の連続波は部分的に有効であった。

(2) 16時25分のエンジン・ノイズは、非常に有効で地上の基地を防御した。

j. 3410kcと7310kc : 無視してよい。

k. 11160kc : 17時17分～18時05分の安定した連続波信号は有効であった。

## 7. 遭難

第73航空団と第313航空団には遭難通信があったという報告がなかった。第58航空団では、23時35分に17V752〔爆撃機の番号〕から、生存者を発見したので、位置を伝えると送信してきた。また、17時40分、22V754が高度と進路を送信し、第2エンジンが故障したと伝えてきた。第314航空団では、1機から遭難通信を受けた。それは、B29が海中に墜落した、位置を伝えるものの生存者は1人もいないであろうという報告であった。その機は、調査するよう指示され、情報は関係当局者に転送された。

## 8. 装置の故障

AN/ART-13 : 作動せず1、回線ブレーカー作動せず1、電鍵リレー不動1、AN/ARN-7 : ハンティング5、低周波数帯において作動せず1、作動せず1、パイロットのコントロールボックス作動せず1、センス・アンテナの破損2、ループ作動せず1、SCR-522 : 作動せず6、チャンネルの切り替え不能1、BC348 : 作動せず1、発振器の同調不良1、アンテナ・リードの破損1、インターフォーン : ダイナモーターの発火2、作動せず1、マイクロフォーンのスウィッチ作動せず4、ジャックボックスの漏電4、コールポジション作動せず1、RL-42 : 作動せず10、5つの錘が失われた、アルディス・ランプ : ショート1

付篇D 情報

第1部—敵空軍の迎撃

第2部—敵の対空砲火

第3部—損害の査定

第1部—敵空軍の迎撃

1. 要約

a. 4航空団の攻撃において、わずか4機の日本戦闘機に遭遇し、16回の攻撃を受けたにすぎない。敵の迎撃による損害や損失はなく、「超空の要塞」の搭乗員にも被害はなかった。

b. 敵の迎撃の欠如は、第一に作戦に障害を与えるような悪天候と有力な夜間戦闘機を保有していないことによると考えられる。

2. 観察の結果

a. 1人のRCM機の操作員が、レーダーを装備した夜間戦闘機からのレーダー信号を受信した。レーダーを備えた夜間戦闘機は鹿児島付近にいたが、発見することはできなかった。

b. 1人の搭乗員が、変動する光を見た。それは、丸く、かわるがわるに明るい赤からほの暗いオレンジに変化した。その光は、最初、離岸地点で観察され、かなりの距離をとって爆撃機を追った（搭乗員は距離を計ることができなかった。1マイル以上であつたらしいが）。その物体は、おおよそ42分間、125マイルにわたって海上の方へ爆撃機の後を追った。その搭乗員は、その物体がこの間に半マイルに追い迫ったといっている。その光については翼や胴体はまったく観察されなかった。結局、その物体は消えてしまった。同じ群団の他の2人の搭乗員も、爆撃目標から離れるときに同じような目撃をした。しかし、しばらくして、その物体は星であつたと結論づけた。最初の報告をした搭乗員は、かれが見たものは星ではないと確信している。

c. 爆撃目標から帰投中のB29のコースに平行して約60秒間にわたって飛行する別の火球があつたという報告があつた。それは飛び去り、消えた。

d. 4機のジェット機あるいは“バカ型”の爆弾が報告されている。そのうちの二つとは爆撃目標からの帰投中に遭遇し、他の二つとは陸地の先端から40と100マイルの所で遭遇した。また、そのうちの一つはB29を攻撃したと報告

された。

e. 遭遇した数機の単発機と双発機はライトを使用していた。2機の双発機が2機のB29を海上の方へ200マイルと300マイル追跡したという2件の事例が報告された。

## 第2部一敵の対空砲火

### 1. 作戦任務番号206—鹿児島市街地域（夜間）

a. 第一目標は、第314航空団の117機によって14時06分～15時49分の間に、高度7000～9200フィートから爆撃された。攻撃軸は295°から340°に変更された。爆撃機の下にひろがる雲量は、3/10～7/10と報告された。

b. 目標へ向かう途中で、鹿屋東飛行場と志布志飛行場の付近で高射砲と探照灯の使用が報告された。高射砲は微弱かつ不正確で、重対空砲と中対空砲とからなっていた。また、探照灯は、この地域で総計5・6基と見積もられると報告された。

\* 航空団高射砲将校の報告に基づく。

c. 目標上空の高射砲撃は、微弱で不正確で鈍重であったと評価された。2～10基の探照灯の存在が報告されたが、それらの効果はきわめて薄かったという。炎の輝きは、探照灯よりも多くの爆撃機を照らし出した。中口径の高射砲は、目標上空において、微弱から強烈なものまであり、かつ不正確であったと報告された。

d. 帰還途中の高射砲攻撃は報告されなかった。

e. この作戦任務中において、高射砲攻撃によって失われた爆撃機はなく、攻撃に参加した118機の爆撃機のうち3機(2.54%)が損害を受けた。

f. 最初に目標上空に到達した10～12機の爆撃機は、市街地の灯火が消えていないことに気がついた。灯火管制は、爆撃の最中に行われた。

g. 2機の爆撃機が臨機の目標を攻撃した。高射砲撃は報告されなかった。

2. 略

3. 略

4. 略

### 第3部—与えた損害の査定

#### A. 鹿児島市\*

1. 現在、鹿児島市の市街地の約44.1パーセント(2.15平方マイル)が、破壊されている。1945年6月18日の第21爆撃機集団作戦任務番号206による破壊は、2.11平方マイルと計算された。それ以前に損害を与えていた面積は0.04平方マイルであった。

2. 鹿児島市街地の元来の面積は、4.87平方マイルである。

3. 産業に対して損害を与えたものとして次のものを含む：  
目標1517、鹿児島鉄道修理工場…10% 損害／破壊  
薩摩綿紡績工場…75%を破壊

4. 参考資料：

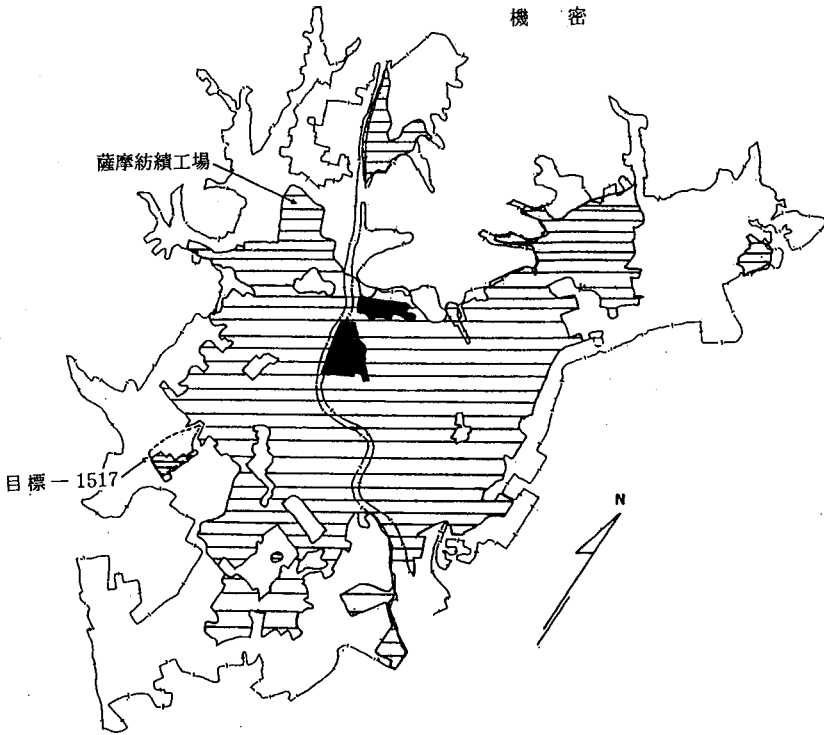
AAF〔アメリカ陸軍航空軍〕空中目標フォルダー 90. 38、1944年8月26日

CIU 損害査定報告40と50

AMS〔陸軍地図部〕鹿児島県(日本九州)12500分の一地図 1944年10月

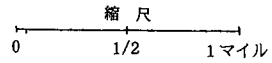
\* 第21爆撃機集団損害査定報告書No.108、1945年7月29日

機 密



鹿兒島市  
 90.38-市街地  
 第21爆撃機集団 作戦任務番号206  
 1945年6月18日  
 C.I.U.-第21爆撃機集団

凡 例  
 ● かねてより損害を与えていた地域  
 ▨ 新たに損害を与えた地域  
 ——— 市街地



35PTU 7-42-53



## 付篇 E 集約統計表

第21爆撃機集団  
軍事行動の総合統計概要  
様式34

作戦任務番号 206—209

1945年6月17日

作戦任務番号206—第314航空団—第1目標—鹿児島市街地

作戦任務番号207—第58航空団—第1目標—大牟田市街地

作戦任務番号208—第73航空団—第1目標—浜松市街地

作戦任務番号209—第313航空団—第1目標—四日市街地

任務の成果

出動飛行機総数	485
司令部保有飛行機数に対する割合	77.7%
第1目標を攻撃した飛行機数	452
出動飛行機数に対する割合	94.8%
第1目標に投下された爆弾	3058トン
その他の標的に投下された爆弾	23トン
爆撃の戦果—予備報告書は次の戦果を報告している	
206—2.0平方マイルあるいは市街地の41%	
207—0.11平方マイルあるいは市街地の2.5%	
208—1.28平方マイルあるいは市街地の30%	
209—1.23平方マイルあるいは市街地の59%	

任務遂行にともなう損失

損失機数	1
出動飛行機数に対する割合	0.2%
損害を被った飛行機数	5
出動飛行機数に対する割合	1.0%
搭乗員の死傷者数	11
作戦参加者数に占める割合	0.2%
硫黄島に着陸した飛行機	13

任務番号 206~209  
日付 1945年5月17日

部隊	隊員機数	出撃予定機数	離陸失敗機数	離陸時間		飛渡日時		第一目標を爆撃した機数	第二目標を爆撃した機数	他の目的を爆撃した機数	他機の任務を遂行した機数	総有効機数	総非有効機数
				日付	一番機	最終機	日付						
314 航空団	167	125 2a	5	120 2	6月17日 0700 Z	0826 Z	6月17日 2112 Z	2328 Z	1	1	2	118	2

a スーパーダン飛機  
注：第21爆撃機集団野戦命令書87号は第58・73・314航空団および第313航空団の3群団に対して、最大努力を求めた。  
硫黄島に着陸した爆撃機 任務番号206-314航空団-3機

任務番号 206~209  
日付 1945年5月17日

第一目標機の爆撃に失敗した機の内訳

部隊	機種の故障	要員の過失による		飛行条件による		敵の攻撃による		その他	
		第二目標爆撃機	他の目的を爆撃した機	第二目標爆撃機	他の目的を爆撃した機	第二目標爆撃機	他の目的を爆撃した機	第二目標爆撃機	他の目的を爆撃した機
314 航空団	2	-	1 a	-	-	-	-	-	-

a 搭乗員の過失

任務番号 206~209  
日付 1945年5月17日

爆撃 初回 程度

部隊	爆撃目標	爆撃を投下した機数	投下時刻		投下高度		可視距離		不可視距離			
			初弾	最終弾	最低	最高	目視のみ	目視による目標を伴った爆撃	参照点・目標点での目視	レーダー・推測航法によって		
314 航空団	鹿児島市街地 川 岩川飛行場	P 117 TO 1 TO 1a	1406Z 1549Z 1447Z	佐 1549Z	任務重量 7000 9200 9000	0.6 9200 -	8 -	21 -	14 -	74 1 1	- - -	- - -

a 第一目標でも投下した爆撃機

任務番号 2.0.6~2.0.9  
日付 1945年6月17日

爆撃機の種類別の投下目標

部隊	爆撃機の型式と重量	信管調整		出撃機搭載爆撃機		目標上に投下		投下目標		投下		持ち帰り		不明
		弾頭	弾尾	個数	トント	個数	トント	個数	トント	個数	トント	個数	トント	
314 航空団	AN-M17A1 500ポンド I.C. AN-447A3 100ポンド I.C. E-46 500ポンド I.C. I-16 照明弾	*なし なし なし	32 11095 2243 55	8.0 378.4 448.6 -	31 10280ポ 2237 54	7.7 354.5 447.4 -	206 -	7.0 -	1 516 6 1	3 17.3 1.2 -	3 1 -	3 1 -	不明	

\* 東京空襲は地上5000フィートで散開するように調整 (I.C.は東京空襲用)

a 目標上に安全に落とされた10爆撃機を含む、それは完全に武装されたワイヤーを使っていた。

任務番号 2.0.6~2.0.9  
日付 1945年6月17日

爆撃機材の損失と損傷・死傷者

部隊	損失				損傷				死傷者					
	敵機 による	敵対空 砲火に よる	敵機 砲火に よる	その他	敵機 砲火に よる	敵対空 砲火に よる	敵機 砲火に よる	その他	不明	不明	不明	不明	不明	
314 航空団	-	-	1a	-	3	-	1	-	-	-	4	1379	11	11

a 日本海岸から50~75マイルの海上に墜落した。理由は不明、11名の搭乗員が行方不明となっている。

任務番号 2.0.6~2.0.9  
日付 1945年6月17日

敵機の反撃と弾薬使用量

部隊	敵機による攻撃		敵機の攻撃と損傷		50口径弾薬消費量	
	撃墜した敵機	撃墜した機材	撃墜した機材	損傷を与えた機材	発射	損失機材
314 航空団	16	1	-	-	100	-
					計	7600

飛行デ-タと燃料消費・重量デ-タ 任務番号 206~209 日付 1945年6月17日

飛行デ-タと燃料消費		重量デ-タ	
作戦任務番号	206	作戦任務番号	206
部隊	314航空団	部隊	314航空団
対象爆撃機数	114	出撃機数	120
平均飛行時間	14:36	平均機体重量 (ポンド)	75640
燃料消費		平均実用搭載量 (ポンド)	59626
平均	5988	積載爆弾の平均個数	混積載量
最大	6410	積載爆弾の平均重量 * (ポンド)	14508
最小	5542	積載燃料の平均容量	6658
残存燃料		積載燃料の平均重量 (ガロン)	40110
平均	712	その他の雑物資の平均重量 (ポンド)	5008
最大	1178	離陸時の平均全備重量 (ポンド)	135266
最小	340		
1時間当り平均消費 (ガロン)	409.8		
出撃機の使用燃料合計	72655		

\* 中心部隊のM-47A2焼夷爆弾を搭載した最大12880ポンド積載可能な爆撃機を含む。

爆弾重量; M-27A2(I.B.) - 70ポンド E-46 - 425ポンド  
 M-17A1 - 465ポンド M-46 - 53ポンド

付篇 F 第21爆撃機集団野戦命令書

発： 第21爆撃機集団司令官	第21爆撃機集団
宛： 第58航空団司令官	司令官の職権により機密
第73航空団司令官	イニシヤル 日付
第313航空団司令官	第21爆撃機集団
第314航空団司令官	ゲアム
情報： CO3RD 写真	6月17日12時00分
	[マリアナ時間午前12時]

野戦命令第87号

1. 帝国上が切れ目なく悪天候におおわれているなかでも、日本の戦争経済に恒常的な圧力を加え続けるために、当司令部は焼夷弾を用いた市街地の工業地帯への攻撃を計画する必要に迫られている。そのために部隊はしばしば計器飛行を敢行し、レーダーにたよって爆撃しなければならない。

2. 第21爆撃機集団は、3航空団で第4航空団所属の3群団とともに、最大努力をもって次の本州および九州の指定された目標を攻撃するものとする。

3.

a. 略

b. 略

c. 略

d. 第314航空団

(1) (a)目視およびレーダーによる第1目標：鹿児島市街地

爆撃中心点

064083

必要とされる兵力

第314航空団最大努力

参考資料：第21爆撃機集団 石版モザイク写真鹿児島地方 No.90.  
38市街地

(2) 航路

基地

硫黄島

北緯30° 50′ —東経131° 04′

北緯31° 14′ —東経130° 47′ (攻撃始点)

目標

北緯31° 40′ —東経130° 40′

北緯31° 30′ —東経131° 25′

硫黄島

基地

(3) 爆撃高度：7000—7800フィート

(4) タイムコントロール：離陸ゼロ時刻

(5) 搭載する爆弾

(a) タイプ：2 群団—M47焼夷爆弾

2 群団—E46集束焼夷弾

(b) 信管：M47焼夷爆弾—瞬発弾頭信管

E46焼夷弾—目標の2500フィート上空で散開させる

(c) 投下間隔調整装置の調整：M47焼夷爆弾—75フィート

E46集束焼夷弾—50フィート

(6) 爆撃方法：M47焼夷爆弾を搭載した群団が最初に離陸し、各機個別に行う。航空団は目標上空での爆撃時間を70分以内に圧縮する。

(7) 途中の高度：5000—5800と9000—9800フィート。

x. ゼロ時刻は171700k〔マリアナ時刻17日17時00分〕

帰投時の高度：10000フィートかそれ以上。

4. a. 交代なし。

b. これは、第21爆撃機集団の任務番号：

(1) 鹿児島—206

(2) 大牟田—207

(3) 浜松—208

(4) 四日市—209

5. a.

(1) 第21爆撃機集団司令部の SOI と SOP 攻撃報告書、敵との接触報告書、そして、IFF 手続き。

(2) それぞれの戦隊は、190—210mc の周波数帯を一斉妨害する装備を

する。

(3) 目標上空において、レーザーの一斉照射の程度と信頼性について観測をすること。

(4) スポット電波妨害は、周波数帯180—190mc と210—220mc 上で、航空団の RCM 将校の命令により、各航空団の能力に応じて行われる。

(5) 本州の50マイル以内に接近したときから電波妨害機は常に作動させておくこと。そして、それ以外のときには休止させておく。ただし、飛行前と飛行後の周波数チェックは別とする。このチェックは、妨害機が爆撃機に装備されている時間内に地上で行われるべきである。

キスナー

第21爆撃機集団司令部大将

署名

モンゴメリー

D/OPNS

配布：各航空団ごとに2部